

大 学 生 の 職 業 的 価 値 観

原 一 雄

- I. 序論：大学教育と職業的価値志向
- II. 調 査 研 究
 - 1. 目的と方法
 - A. 調査の概略
 - B. 調査用質問紙
 - C. 被験者と評価方法
 - D. 研 究 課 題
 - 2. 結果と考察
 - A. 職業的価値の因子構造
 - B. 職業的価値の一般性
 - C. 職業的価値からみた大学生間の類似性
 - D. 職業的価値の自己評価と一般的評価との葛藤
- III. 要約と結語

I. 序論：大学教育と職業的価値志向

大学の役割りを、高度の学問研究と同時に高等教育の場として論ずるならば、個々の学生が、どのように自己の人生の意義を把握し、将来の社会における実践に対する方向づけを養い育てるであろうか、すなわち、個人の価値観の確立と職業選択の指導と云うことは、教授内容の充実と共に、教育関係者一同の中核的な関心事である。そうして、学生自身にとって、この自己の職業を選択することは、配偶者の選択と並んで、青年期あるいは人生最大の重要な意志決定の一つと云えよう。

さて今日の社会においては、自己の家庭を礎く以前に職業人としての大凡の進路を決めるのが普通であり、また一度選択し決定した以上、そう容

易に職場を変更できないのが実状である。たしかに、一つの職業を一生涯続ける人は稀であるかも知れない。家の制度がくずれた今日、祖先伝来の家業とか、親譲りの職を継がねばならないと云った社会的制約が薄れ、自分の興味・特技・適性と云ったものによって、職業を選ぶ自由がかなり許されている。しかし、一度決めた職を投げ捨てて他の職へ転ずるには、相当の危険を覚悟しなければならず、また世間ではかならずしも望ましいことと考えられてはいない。よほど多才な人か、さもなければ移り気の多い人か、あるいは何をさせても技術が身につかぬ人間と考えられるのが通常である。

そこで本来、職業指導は義務教育の終りまでに充分なされなければならない。教育界はこの点を深く考慮し、諸々の努力がなされてきた。そうして、現在諸外国では、職業選択を長い観察期間の中で行われる進路指導の一目標とし、正規学校教育の中で、その重要性がますます強調されてきている。

しかるに今日の日本において、中学・高校の生徒達、特に上級学校進学希望者達に、現在努力している勉強が、自分の将来の社会生活、すなわち職業と家庭生活に、如何ほどの関連を持っているのか考えさせるような指導が果して充分行われているであろうか。とりも直さずこの問題は、受験勉強の虜になっていた彼等が、大学入学後も持ち続ける課題である。今日の大学生の中には、一面非常に観念的な主義主張を口にしつつ、また片方において大層現実的・打算的な処世術を身につけながら、しかし、さてこれから送る4年間の大学生活を、自分の人生にとって本当に如何なる意義を持たすべきかと云う課題については、思索と経験の具体的な方針はおろか、問題の重要性の自覚すら持たない者が数多く見受けられる。

上に述べたような事柄は、青年期の一般的特徴として当然のことであり、その困惑と暗中模索の過程の中で、始めて人間としての成熟が行われるのであると、教育者は暖かい眼で彼等を見守る必要がある。彼等には自分自身の能力が社会でどのように評価されるのか、自分の才能が将来の社会で

運用に堪えられるものか否か、その上如何なる仕事に如何なる訓練と知識が更に必要とされ、どのような将来の保証と前途が開かれているかなど、不明且つ不確定の要素があまりに多過ぎよう。今後技術革新の速度が増して社会の変容が激しくなる時代には、この傾向が益々増大し、問題が一層深刻化することは疑う余地がない。

しかしながら、このような状態は、終端教育としての大学に在学している間に、いささかでも解決の方向へ向わせなければならず、大学は授業・研究・課外活動を通して、進路指導への努力を一層積極的に行わねばならない。本学において Dr. M. E. Troyer 教授のリーダーシップの下に始められた社会科学科一般教育の一講座「価値観の研究」も、以上の観点から起案され、実施されたものと筆者は理解する。このコースにおいては、学生一人一人に自己の将来への展望を明らかにさせ、自分の生き方を確立させるための努力がなされた。すなわち、先ず自分の生活を支配する動機（価値・信念体系）を可能な限り客観的に分析し、古今の文化を貫く社会生活の指導原理と対比させながら自己の理想像を創り上げ、その目標へ到達する過程を現実の生活の中に見い出させ、そこに自己を主体的にかかわらせて行く道を工夫させると云う図式の上で、毎日の学生生活に真の意義を見い出させようと試みた。その一部として筆者は職業的価値志向に関する調査を担当し、ここにその結果を報告する。

II. 調 査 研 究

1. 目 的 と 方 法

A. 調 査 の 概 略

この調査は、前章に述べた観点から、質問紙を用いた態度評価法によって大学生の職業的価値意識を測定し、今日の大学教育における進路指導、なかんずく職業選択の補導の実体を吟味し、よって高等教育のガイダンスの領域へ新らたな観点を寄与せんとするものである。この目的のため、本学が1961年以来5年間継続実施してきた「大学生の価値観研究」の中に、

職業的価値に関する資料を求めたので、まずその研究調査全体の概略を述べる。

本学においては、教養学部全員に対し、社会科学科一般教育の一部として「価値観研究」と称するコースを設け、1年次春学期・2年次冬学期・4年次秋学期にそれぞれ1単位を当て、そこにおいて価値の問題に関する社会学的・人類学的・心理学的諸研究を紹介しつつ、同時に一連の質問紙による検査を施行してその結果を各個人にフィードバックし、全体の結果と自分の評価得点を比較させ、クラスの討論を通して各自の意志決定の基盤となっている価値体系を明らかにさせようと試みた。そこで使用された検査の諸項目を紹介すれば次の通りである。

- 自由作文（自己の将来への期待と展望）
- 人生観
- 宗教倫理観
- 政治経済観
- 美術音楽観賞
- 価値興味
- 権威主義・独善主義的態度
- 職業選択
- 道徳意識
- その他各種状況テスト

これらの内、職業的価値に関しては、ローゼンベルグ(M. Rosenberg)の質問紙を用い、職業の選択を通して価値志向の客観的表出を試みた。また入学願書に記載されている将来への希望や、自由作文に序述された自己の未来像を、間接的ではあるが重要な資料として収集に努めた。

B. 調査用質問紙

ローゼンベルグは、1952年 Cornell 大学において、次の10項目からなる職業的価値質問紙(Occupational Value Inventory, 以下略して OVI と称す)を作成した。すなわち、

- a. 能力や適性を生かすことができる
- b. 十分な収入が得られる
- c. 独創的もしくは創造的な活動ができる
- d. 社会的な地位や名声が得られる
- e. 物ではなく人と一緒に働くことができる
- f. 安定した変動のない将来が約束される
- g. 他人の監督から比較的自由である
- h. 指導者的な手腕をふるうことができる
- i. 新奇なことや冒険的な経験ができる
- j. 他人のため助力する機会がある

の諸項目である。これらは、アメリカ人大学生4500名の資料を元に項目間の内部相関を吟味した結果、(1)自己表現志向的 (self-expression oriented), (2)外来的報酬志向的 (extrinsic reward oriented), (3)他人志向的 (people oriented) の3つの価値複合体に分類され、(1)は質問項目の *a* と *c* に、(2)は *b* と *d* に、(3)は *e* と *j* に代表されていると云われる。(8, Pp. 11~13)

以上の分類は、マズロー (Maslow, A. H., 3) 及びその他 (4, 7) が同じく職業の選択とそこでの生活に、どのような欲求を抱き、満足を求めようとしているかについて提案した5つの基本的欲求と極めて良く一致している。マズローの云う**生物学的欲求**と**安全の欲求**は上述の(2)に、**所属と愛情の欲求**と**尊重の欲求**は(3)に、**自己実現の欲求**は(1)に対応するものと考えられよう。またクライテス (Crites, J. O.) やオツコーナー (O'Conner, J. P.) 達も、それぞれ因子分析を用いた研究の結果、職業的価値は**物質的・経済的安定**と、**地位・社会的承認・名声・仲間関係**と、**独立・成就達成・自由・創造**の3つに大別される(1, 6)と述べており、用語上の差違はともかく、これら3つの職業的価値意識の範疇は、西欧文化圏内において一応実証された欲求体系と考えて誤りはなからう。

C. 被験者と評価方法

本学教養学部1963年度入学者、男子117名、女子111名が、4年間在学中3度繰り返し回答した反応を基礎資料とし、他に1964年度以降の本学入学者、ローゼンベルグの研究(8)、中西・武衛による大阪大学の研究(5)を、比較のための参考資料に用いた。

本調査において OVI を施行する際、原著と同じく10項目に選択の順位を付けさせると共に、新たに[・]大[・]切[・]さに関する4段階の評点尺度を備えて各項目をそれぞれ評価させ、更に個人の価値判断の外に、「社会一般の人々はどう思っているかあなたは思いますか」と云う質問を設け、本人の認知する「他人」一般の評価をも上と同じ方法で問い質した点が、ローゼンベルグ並びに中西等の研究と異っている。

このように10の項目各々につき、「自己」及び「他人」の職業的価値を、選択順位と評価尺度値の両者によって表わすことができるが、項目全体のパターン、すなわち職業的価値相互の関係をみるためには主として順位得点を、また被験者群間の比較とか時間的推移を観察するためには、統計的处理に便利な評価尺度値が用いられた。

また3つの価値複合体を、それぞれに概当する諸項目の順位または評点を以って表わす場合がある。これら価値複合体は、その因子構造が必ずしも総ての場合に一定しているとは限らないが(本章2-A節参照)、比較研究のためには、一応[・]自[・]己[・]表[・]現[・]志[・]向として項目 a, c, g, i を、[・]外[・]的[・]報[・]酬[・]志[・]向として項目 b, d, f, h を、[・]他[・]人[・]志[・]向として項目 e, j を採用し、それらの平均値が求められた。

D. 研究課題

質問紙 OVI の成り立ちの説明に際して述べた如く、ローゼンベルグは職業的価値に3つの基本的価値志向(複合体)を見い出し、それらが欲求体系に関する他の諸理論と甚だ良く対応すると論じた。さてこの仮説が、1950年代初頭のアメリカ合衆国における研究から生れたものであっても、果して他の異った社会文化的背景を持つ大学生群に適応するか否かの疑問が生じるのは当然であろう。そこで先ず、この調査に用いられた被験者達

が、同じ質問紙に対し、同じ反応パターン、すなわち同じ因子構造を持つか否かの検討が行われる必要がある。(調査A)

次に、職業的価値の因子構造を明らかにした上で、各項目に対する反応から被験者群の間に、如何なる共通点と特性が見い出されるかを検討しなければならない。(調査B)

更に、この調査の主目的である所の長期に渡る継続的追跡研究は、大学在籍4年間における職業的価値志向の変化を明らかにするであろう。(調査C)

最後に、この調査が試みた自己の職業的価値意識と一般社会(他人)が抱いていると認知される職業的価値との間に起る葛藤の解明(調査-D)を通して、日頃の学習生活に対する学生の態度の理解を深め、卒業後の就職と進学を含めた青年後期における広範な進路指導のあり方に、何らかの示唆を求めんとするものである。

2. 結果と考察

A. 職業的価値の因子構造

調査質問紙 OVI に含まれる10項目相互の相関を男女別に求めると、それぞれ Table 1—a, b のようになる。これに対し、前述のローゼンベルグおよび中西・武衛の研究結果を比較させると、それぞれ Table 1—c, d の通りである。

これらの相関マトリックスを用いて因子分析を行った結果、本学学生の資料からは Table 2 の如き負荷量を持つ3因子が抽出された。

ここにおいても、ローゼンベルグの指摘した如く3つの因子が抽出され、またそれらが質問項目を成り立たせた仮説(前節1B参照)に或る程度相似していることを知る。すなわち、男女を問わず因子Ⅱは項目 b, d, f, h の負荷量が多く、之はローゼンベルグの称する外来報酬志向に対すると云えよう。之に反し、自己表現志向と目される因子Ⅰは、男女共に c, g, h, i などから成り立ち、ローゼンベルグの選んだ代表項目の一つ、c を含んでい

Table 1. Inter-item correlations of the Occupational Value Inventory.

a. Hara at ICU, 1963. (Male: N=117)

[illegible]

b. Hara at ICU, 1963. (Female: N=111)

[illegible]

c. Rosenberg at Cornell, 1952. (N=4, 585)

[illegible]

d. Nakanishi et al. at Osaka Univ., 1961. (N=531)

	b.	c.	d.	e.	f.	g.	h.	i.	j.
a.	-.126	.502	-.103	-.370	-.198	-.060	.230	.295	.106
b.		-.150	.682	-.133	.513	.040	.202	.031	-.313
c.			.005	-.226	-.230	.392	-.228	.158	.145
d.				.223	.237	.091	.339	.247	.021
e.					.098	-.313	-.082	.197	.449
f.						-.069	.305	-.491	.186
g.							-.177	.501	.219
h.								-.123	.513
i.									.085

Table 2. Factor analysis of the Occupational Value Inventory based on the results obtained from ICU freshmen.

	Male				Female			
	I	II	III	h ²	I	II	III	h ²
a.	-.038	.127	.366	.151	-.114	-.017	.889	.803
b.	.036	.788	-.141	.642	-.119	.868	.076	.773
c.	.679	-.150	-.056	.486	.383	-.028	.710	.652
d.	.220	.792	.188	.710	.232	.793	-.194	.721
e.	-.006	.231	.782	.666	.750	.019	.103	.573
f.	-.290	.690	.222	.609	.127	.833	.031	.710
g.	.569	.133	-.005	.341	.820	.220	.031	.722
h.	.448	.627	.158	.620	.574	.464	-.138	.564
i.	.766	.116	.055	.603	.870	.100	-.031	.769
j.	.106	-.307	.782	.717	.511	-.094	.282	.350

るが、もう一つの代表項目 a はむしろ因子 III に属して一群を形成しており、男女それぞれ異ったニュアンスを持つ因子構造を示している。

男子学生にとって、能力適性を生かすことは他人志向と関連づけられて考えられ、女子学生では、創造的活動と結びつけられて、典型的な自己主張志向を形成している。また男子学生が、他人の監督からの自由・指導者的手腕・新奇的経験などを創造的活動と関連づけているが、女子においては、これらが他人志向と一群を形成している。以上の結果から、男子にと

って、自己の能力や適性が他人志向を介してしか発現できないこと、すなわち自己主張が極めてひかえ目であること、また女子も、他人志向の中に自己表現の途を求め、未だ外部に依存する所が多く、共に真の自我の確立に至ってはいない事を物語ると解釈できよう。

B. 職業的価値の一般性

1962年より4年間、新入学1年生について、OVI 10項目の選択順位の平均を入学年度毎に求めたところ、Fig. 1 のような結果が得られた。また Fig. 2 は、1962年度入学者の入学時における性差を示し、Fig. 3 は、同じ被験者群の入学時と卒業時における平均選択順位が比較されている。Table 3 には、これらの図の資料となった集団毎の項目別平均順位と共に、平均標準誤差が示されている。

まず項目の平均順位から、“期待される職業像”を追ってみると、何よりもその反応パターンの類似性に驚かされる。ここに使用された評点は、各集団の平均値であり、平均標準誤差 2.2 程度の個人差を含む数値ではあ

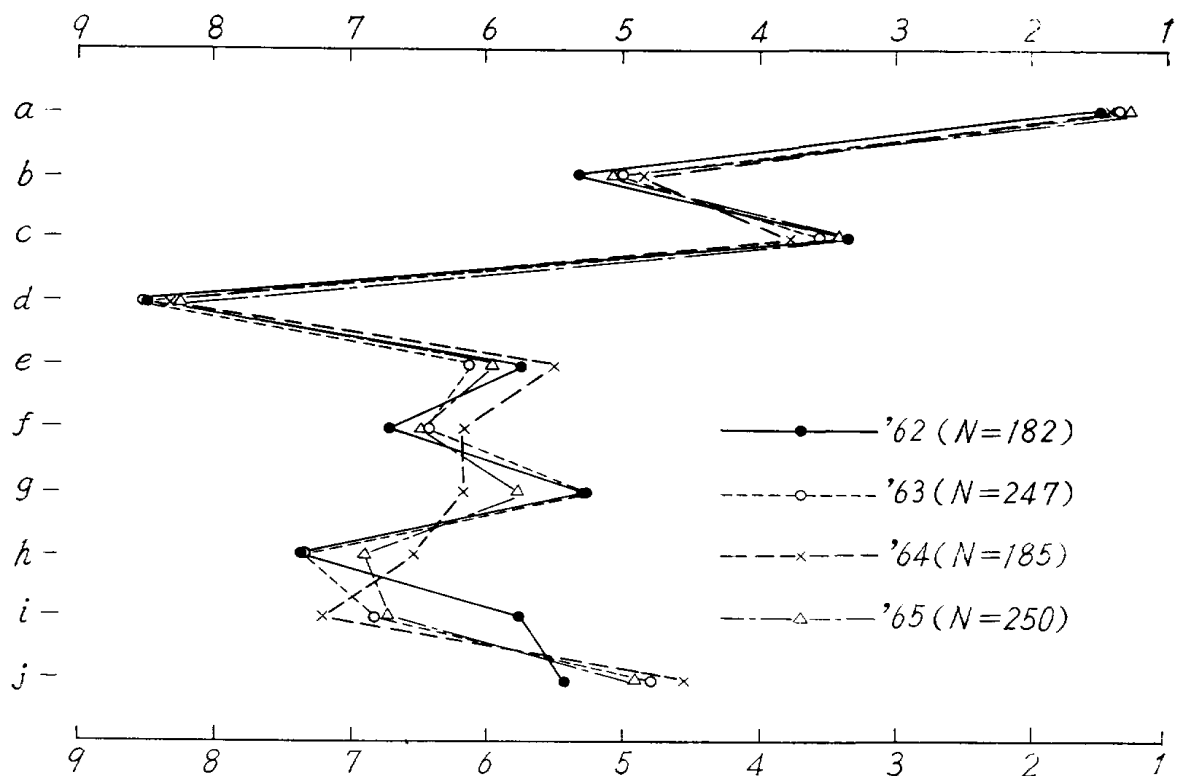


Fig. 1 Comparison of "Self" mean ranks by year of admissions.

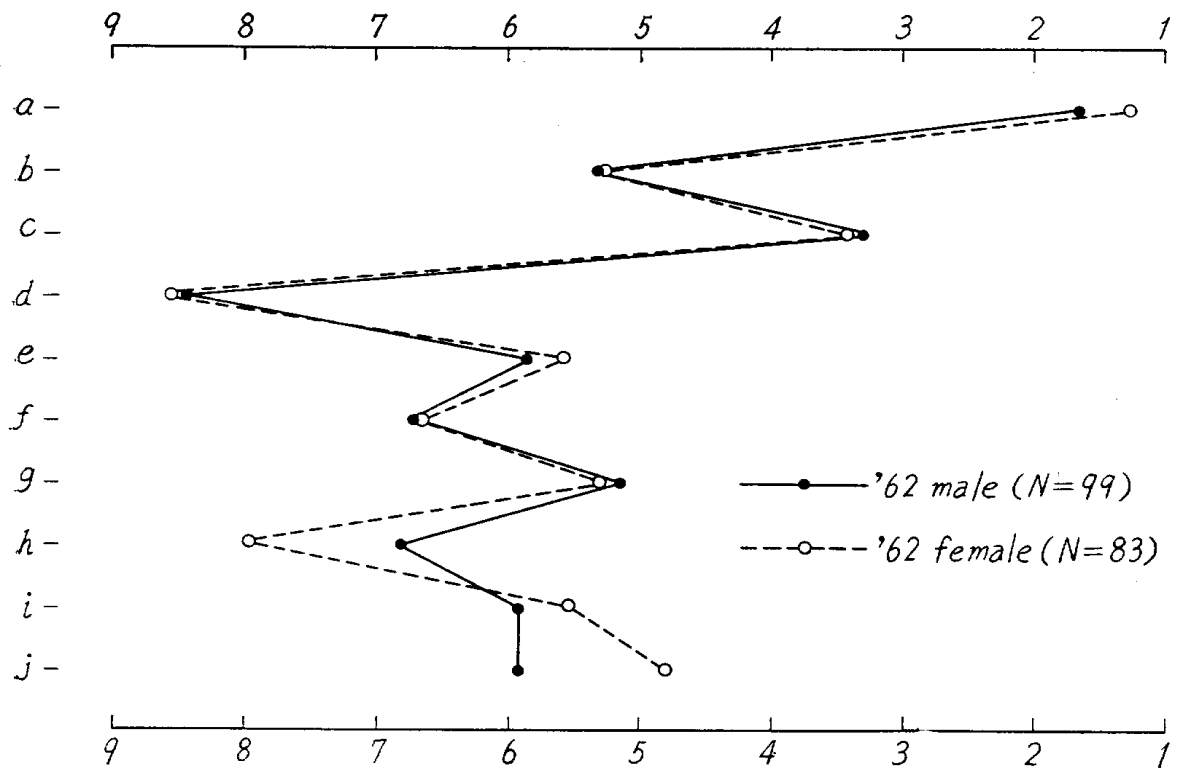


Fig. 2 Comparison of "Self" mean ranks by sex.

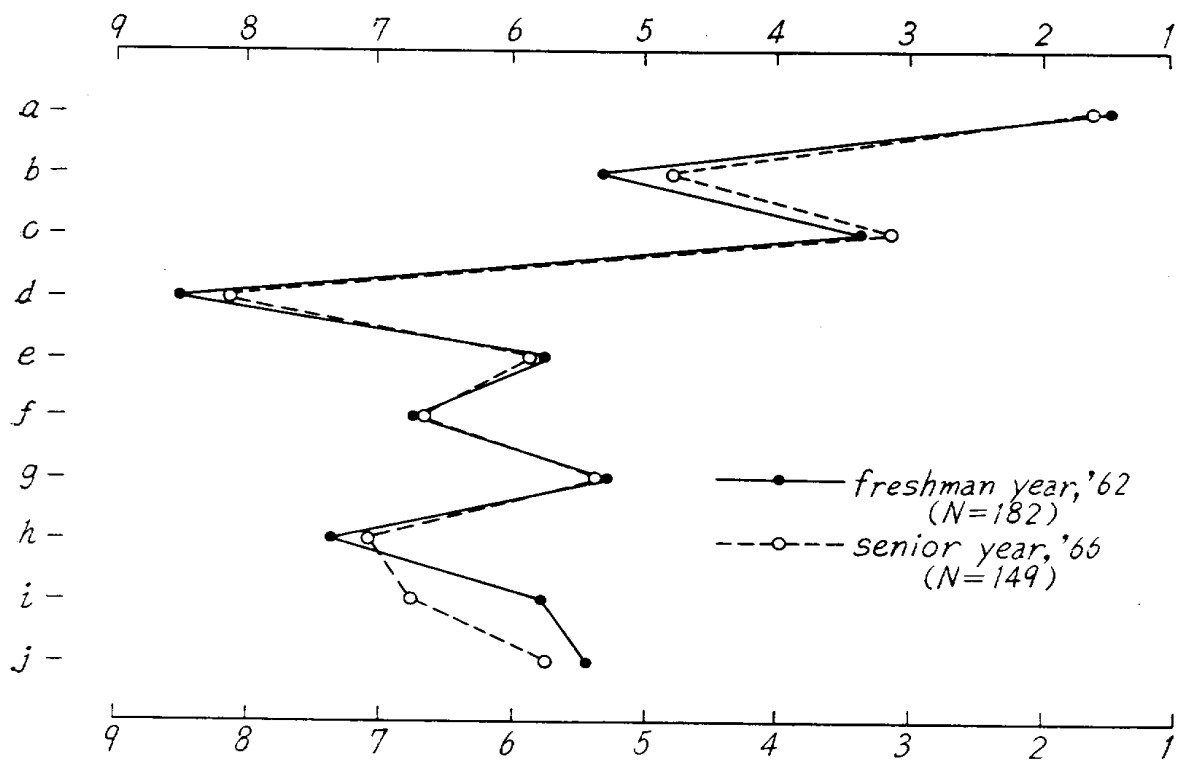


Fig. 3 Change of "Self" mean ranks during college life.

Table 3. Comparison of mean ranks and mean standard errors by the years of admission.

Year	1962 ¹	1962 ²	1963 ¹	1964 ¹	1965 ¹
Male (N=)	(99)	(77)	(130)	(95)	(110)
Item: a	1.65±1.34	1.73±1.26	1.41±0.87	1.49±1.30	1.38±0.88
b	5.30±2.50	4.75±2.61	4.81±2.51	4.53±2.44	5.11±2.13
c	3.29±2.05	2.83±1.69	3.10±1.75	3.47±2.17	3.36±2.03
d	8.43±1.75	7.95±3.25	7.81±2.60	7.48±2.97	8.36±1.80
e	5.86±2.66	6.13±2.94	5.92±2.82	5.49±3.10	6.48±2.56
f	6.69±2.24	6.45±3.10	6.58±2.60	5.77±2.76	6.68±2.34
g	5.15±2.10	5.13±2.49	5.05±2.55	5.77±2.71	5.36±2.28
h	6.81±2.37	6.21±2.79	6.41±2.62	5.58±2.50	6.43±2.29
i	5.91±2.48	6.95±2.94	6.37±2.70	6.73±2.86	6.51±2.54
j	5.91±2.63	6.12±3.10	5.05±2.47	4.89±2.86	5.33±2.60
Female (N=)	(83)	(72)	(117)	(90)	(140)
Item: a	1.28±0.68	1.42±0.69	1.20±0.49	1.22±0.55	1.19±0.63
b	5.29±1.90	4.68±2.16	4.96±2.19	4.69±2.20	4.46±2.33
c	3.43±2.07	3.39±1.89	3.68±1.99	3.72±1.69	3.37±1.83
d	8.53±1.89	8.27±2.91	8.49±2.36	8.36±2.53	7.38±3.26
e	5.57±2.53	5.35±2.76	5.74±2.60	4.96±2.57	4.89±2.83
f	6.70±2.48	6.70±2.81	5.68±2.51	6.01±2.65	5.60±2.93
g	5.30±2.17	5.44±2.17	5.02±1.93	6.02±2.30	5.44±2.88
h	7.96±1.85	7.75±2.69	7.66±2.24	6.88±2.54	6.51±2.86
i	5.54±2.39	6.36±2.75	6.55±2.65	7.00±2.58	6.13±3.15
j	4.82±2.45	5.21±2.83	4.05±2.32	3.89±2.08	4.01±2.38

Note: 1. Spring term of freshman year.
2. Fall term of senior year.

るが、被験集団毎の平均順位はほとんど変わらない。

本調査の被験者群は、職業を選ぶにあたって、先づ第一に自分の能力と適性を生かせる途を求める。次に独創的・創造的な活動を期待している。また、他人のため助力する機会と同じく、十分な収入が得られることも、常に順位の中央より上に位している。反面、社会的な地位や名声のために職業を選ぶと云うことはほとんどない。以上の順位は、平均選択の代りに、

大切だと思える程度を尺度値に表わしても、全く変らない。

しかしながら、項目の中には、入学年次によって多少変化するものもある。例えば、十分な収入・社会的地位と名声・安定した将来・指導者的手腕と云った項目は、わずかながらも年々高く評価されていく傾向がうかがわれ、新奇冒険的経験は序々に順位が下がる傾向がみえる。

男子学生と女子学生を比較した場合、前述の職業選択順序はほとんど変らない。但し、男子学生が他人のため助力することを、左程大切なことと思わないのに対し、女子学生は指導的手腕を振うことを避けている点が異っている。

またこのような評価のし方が、果して大学在学中に変化するか否かの疑問に対し、同じ集団について、入学時と卒業直前とに調査した結果は、全体のパターンにほとんど変りがなかった。4年生になって、外的報酬志向因子を多く含む項目(b, d, h)にやや順位上昇が示され、新奇冒険を拒否する傾向がうかがわれる。また標準偏差の増減を調べると、上級になるに従って大きくなり、各個人の評価判断に変化が多くなることを示すと同時に、ここにおいても、項目 b, d, f, h が特に大きなチラバリを持つことは、外的報酬志向が個人差の表れ易い領域であることを立証している。

C. 職業的価値からみた大学生間の類似性

前節の Fig. 2, 3 ならびに Table 3 に示された如く、4年間の大学生生活において、この OVI に表わされる職業的価値の好悪にはほとんど変化がなく、又男女の間にも左程差があるとは考えられない。この集団間の類似性を示すものとして、両群が10項目の職業的価値に与えた順位の間の相関を求めた結果が Table 4 である。

そこでこの順位相関係数を用いて、本学の学生と他の学生との比較を試みた。同じ OVI が使用された例として、質問紙の著者ローゼンベルグ(8)の研究と、中西氏ら(5)による大阪大学の報告を挙げることができる。しかしながら、この両者とも、被験者に各項目毎に「非常に重要」か「重要」か「そうでなし」の評価をさせ、最上位2項目についてのみ順位をつけさ

Table 4. Rank-order correlation coefficients of occupational values among ICU sub-groups.

	All Ss	(Male)	(Female)
Freshman vs. Sophomore	.964	.967	.988
Sophomore vs. Senior	.976	.906	.951
Freshman vs. Senior	.976	.951	.976
Male vs Female :			
Freshman	.912		
Sophomore	.964		
Senior	.915		

Table 5. Rank orders of occupational values obtained from 3 different university groups.

Item	All Ss			(Male)			(Female)		
	Cornell	Osaka	ICU	Cornell	Osaka	ICU	Cornell	Osaka	ICU
a	1	1	1	1	1	1	1	1	1
b	5	6	4	4	6	4	7	8	4
c	3	2	2	3	2	2	5	2	2
d	9	10	10	9	10	10	10	10	10
e	6	8	6	5	8	5	2	6	7
f	2	3	8	2	3	8	3	3	8
g	8	4	3	6	4	3	6	4	5
h	7	9	9	8	9	9	9	9	9
i	10	7	7	10	7	6	8	7	6
j	4	5	5	7	5	7	4	5	3

Table 6. Rank-order correlation coefficients of occupational values among university groups.

Univ.	All Ss	(Male)	(Female)
Cornell vs. Osaka	.770	.794	.806
Osaka vs. ICU	.721	.733	.709
Cornell vs. ICU	.527	.612	.552

せているので、本研究が用いた方法とはいささか異なるが、10項目の価値順位を知ることは可能である。その結果をまとめたのが Table 5 であり、これによって被験者全員、男子、女子の各々について、3 大学（Cornell、大阪大、ICU）相互の順位相関を求めた所、Table 6 のような結果が得られた。

この表から、被験者群全体についても、又各性別の集団についても、一番高い順位相関は Cornell 大学と大阪大との間に見い出される事が判った。又一番低い相関は、いずれの場合も Cornell 大学と ICU との間であった。そこで順位に大差のある項目を手掛りに、これら 3 つの集団の特徴を探してみると、極めて興味深い結果が見い出された。すなわち、項目 a と d は、最上位と最下位として、総ての集団に共通した評価であり、項目 h と j も割合一定した順位が与えられている。それに反し、Cornell 大学の学生は日本人学生に比して項目 g（監督からの自由）と i（冒険心）の評価がすこぶる低く、ICU の学生は他の集団に比して項目 f（安定した将来）の評価が低い。すなわち、自由な社会にいると目されるアメリカ人学生が、案外消極的な生活態度を持っており、かえって本学の学生が動乱の社会へ冒険的に乗り出す姿勢を見せている。なお男子学生のみを比較すれば、大阪大学の学生が項目 e（協同作業）に関心が薄く、女子では Cornell 大学学生が項目 c（創造性）を低く、項目 e を高く、又 ICU 学生が項目 b（収入）を高く評価している点が注目される。

D. 職業的価値の自己評価と一般的評価との葛藤

最後に今一度、本学学生から得た資料について吟味したい。さて自分自身の職業について質問した時と同じ方法を用い、社会一般の人々はどのように「よい職業」の条件を考えているかを問い質した結果、Fig. 4, 5, 6 のような反応を得た。入学年度や性別、あるいは入学直後と卒業間際を比較した場合、10項目間の順位にはほとんど変化がない。すなわち、学生達にとって、社会一般の人々は十分な収入が得られることを何よりも良しとし、安定した将来と社会的地位と名声が約束される必要があり、その次に

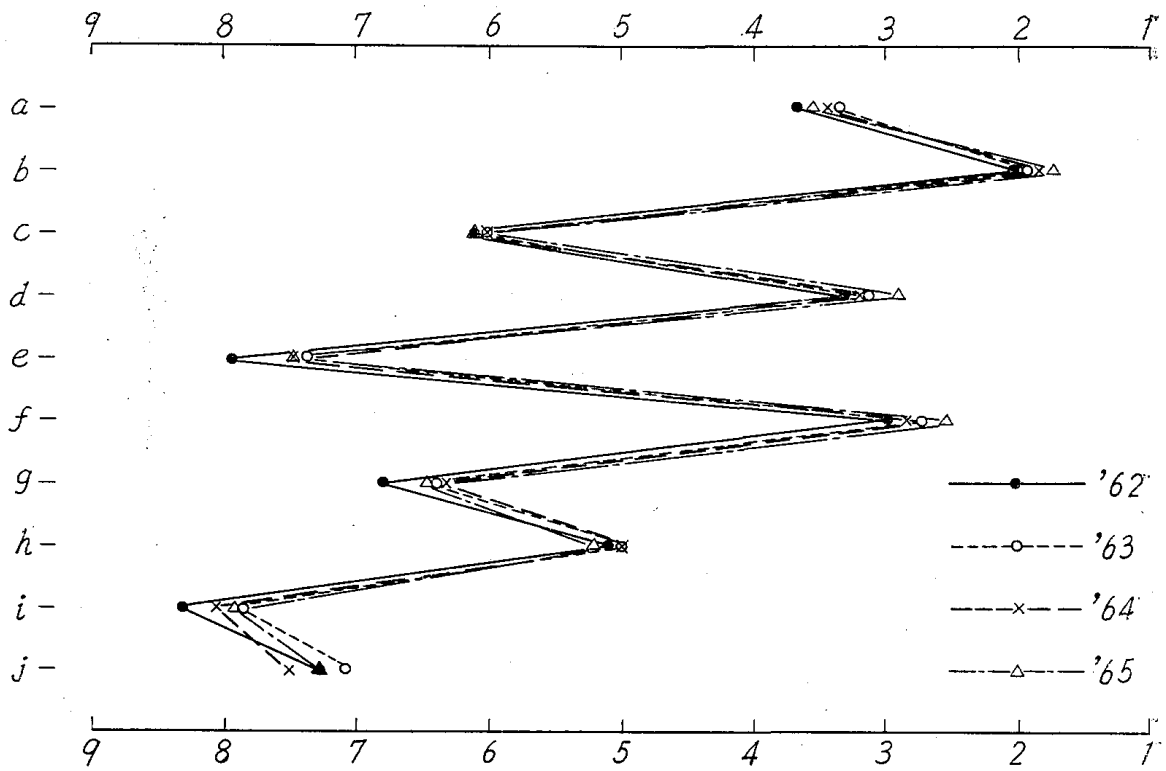


Fig. 4 Comparison of "Others" mean ranks by year of admissions.

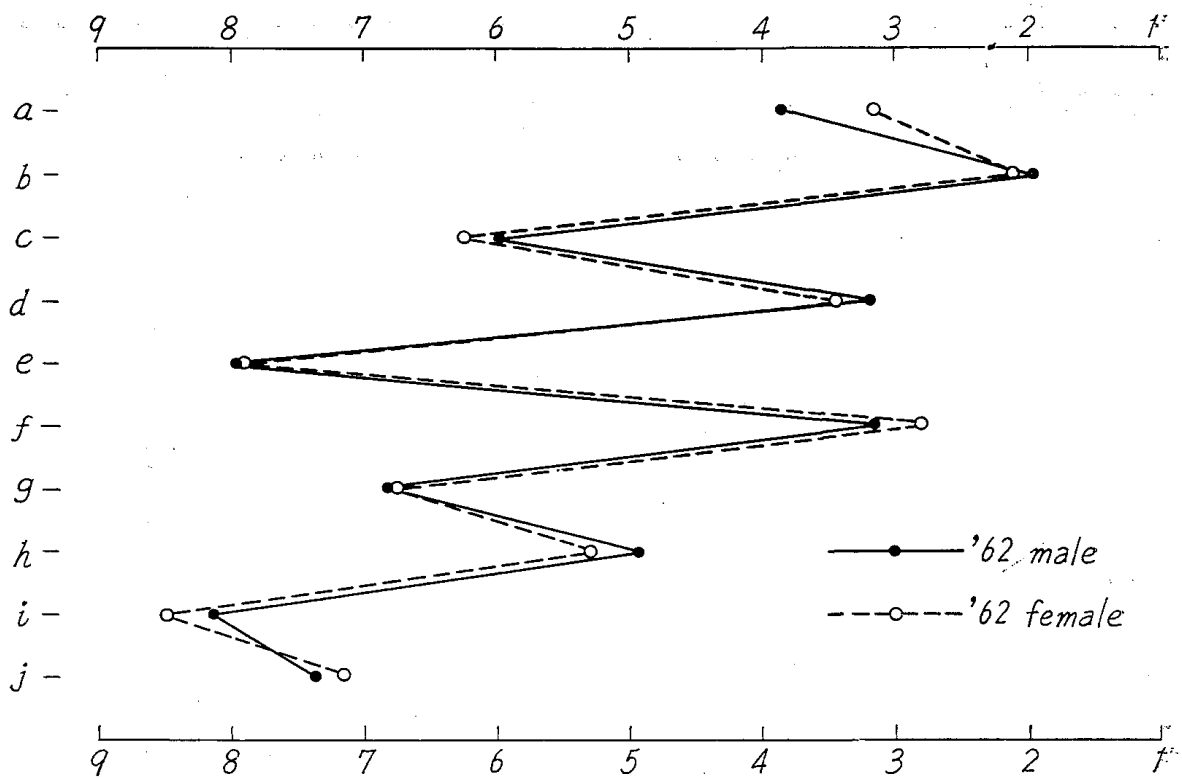


Fig. 5 Comparison of "Other" mean ranks by sex.

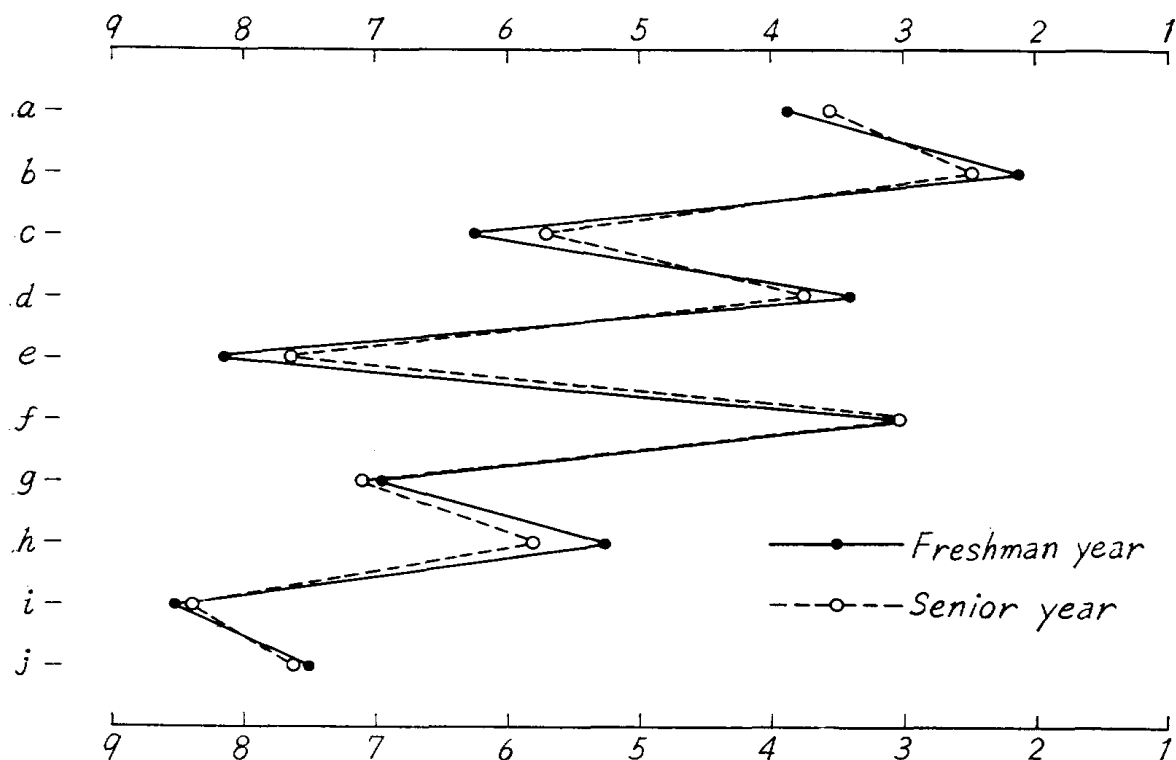


Fig. 6. Change of "Others" mean ranks during college life.

始めて能力と適性を生かす職業が期待されていると云う。その逆に、新奇で冒険的な経験は世間で忌み嫌われ、他人と一緒に働くとか他人のために助力すると云った職業も、世の中では決して高く評価されてはいないと考ええる。ここでは何より報酬志向的価値が優先し、自己実現を志向するような価値も陰に隠され、ましてや他人志向的価値などには、世間は全く顧みようとはしていないと信じている。

ではこのような「他人」が考える職業価値の選択順位に対し、今一度「自己」の価値基準を対応させてみよう。入学時における比較は Fig. 7 に、卒業前における比較は Fig. 8 に示される。

これら両図の上で、二本の線は美事に交差し合っている。すなわち、同じ大学生達が、自分達の心の中で、理想とする職業像と現実待ちかまえている一般社会の職業観の間に、あまりにも大きな隔りがあることを認めているに外ならない。収入のためには、自分の能力や適性も犠牲にする場合が起るであろう。社会が期待するからには、自分では大切でないと考え

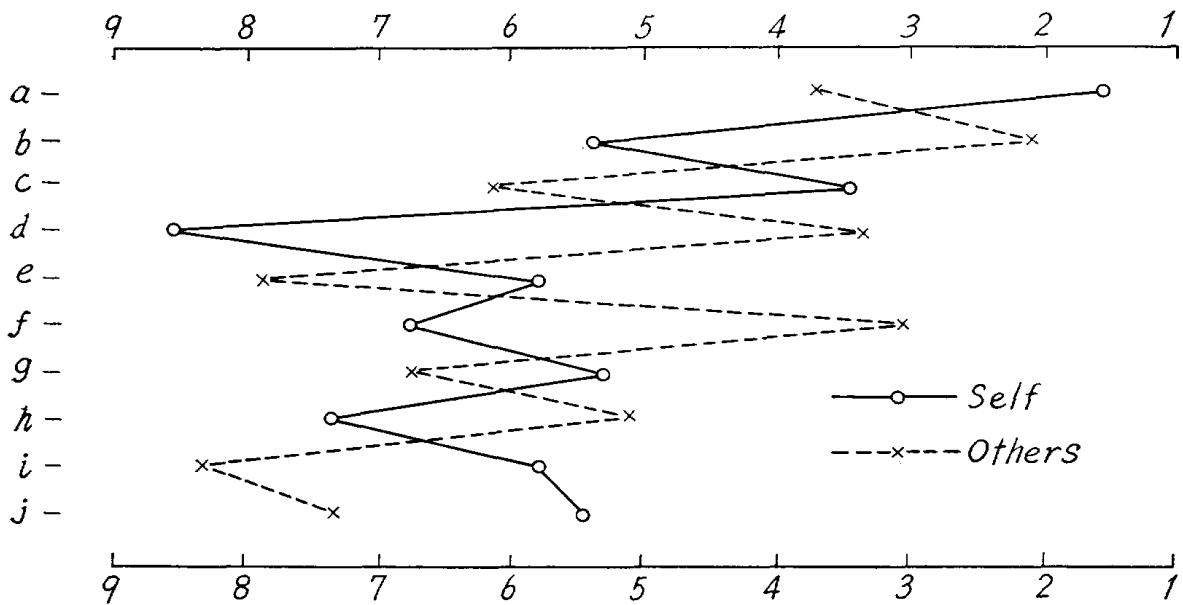


Fig. 7. Comparison of "Self" and "Others" mean ranks at admissions.

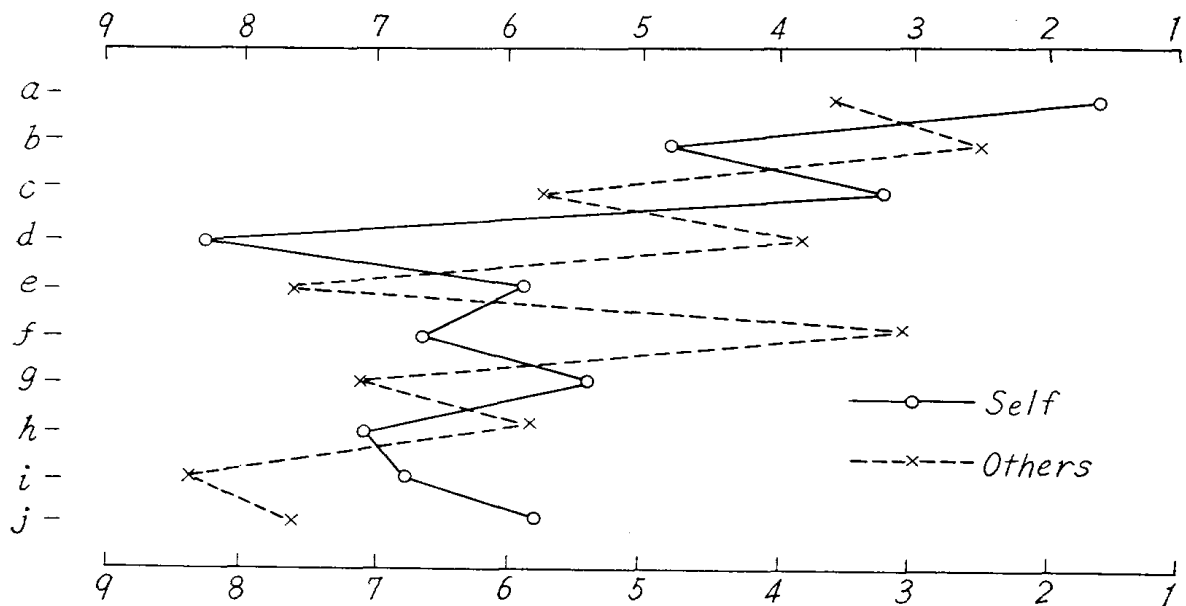


Fig. 8. Comparison of "Self" and "Others" mean ranks at graduation.

る社会的地位や名声も、やはり追い求める必要に迫られよう。そうして、自発的な独創性とか自由さは圧えられ、さらに他人との協力精神とか隣人愛などは、冒険心と共に、社会では一さい無視されることを覚悟しなければならないと云うことを、この図は物語っている。

上に述べた個人の意識内に存在する二つの価値体系、すなわち「自己」

と「他人」の職業的価値基準の間に起る葛藤は、Fig. 8 が示す如く、卒業の時期に至っても一向に減少の傾向を示さないように見受けられる。内在する矛盾の大きさよりも、むしろこの解消の兆のない所に、現代の青年達のやるせない悩みの一端が窺われはしないかと考える。

そこで、更に「自己」と「他人」の差について、職業的価値志向の因子的構造（本章A節参照）を基にして、評価尺度値の変化を詳細に調査した結果、Fig. 9 が得られた。上記のように諸項目の選択順位は変化しなかったにかかわらず、在学4年間に評点値の上では多少の移動が認められ、統計的な有意差は検証されないまでも、それらの傾向から、学生達が無意識にどのような方法で解決の道を見い出さんとしているかを推察することができる。

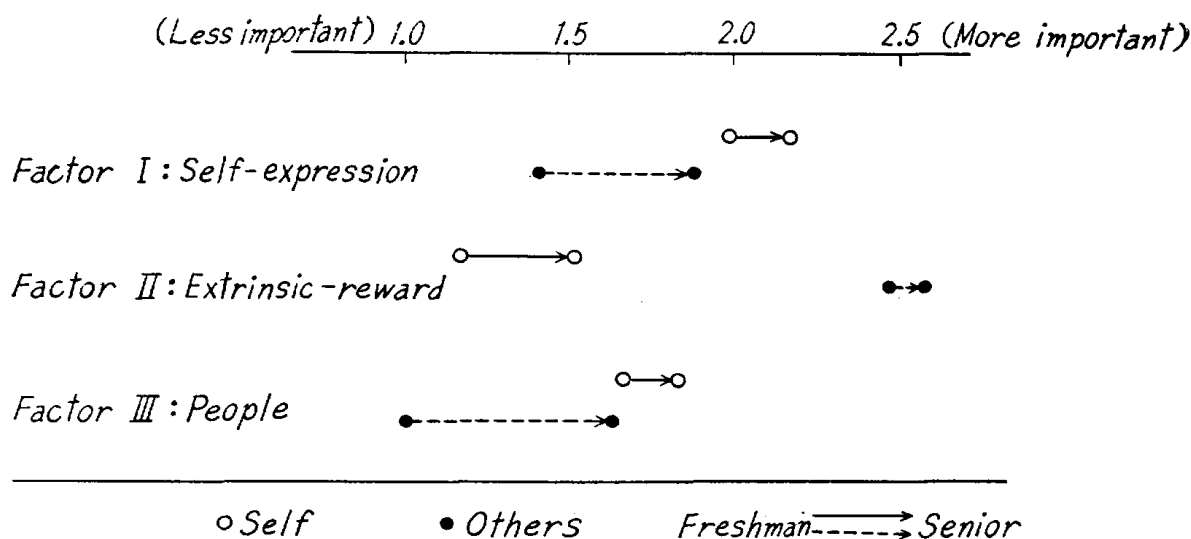


Fig. 9. Factorial analyses of Changes on the occupational values occurred during university life.

自・他のギャップが最大である外的報酬志向因子の項目には、あまり変化がみられない。それに対し、自分の最も理想とする自己表現と他人志向の次元において、上級学年になるに従って自・他の間に歩み寄りが見られる。しかも、「他人」も「自己」と同じように、この種の職業を高く評価するであろうと認知することによって、その差を縮小させている。この傾

向は、同じ被験者群が道徳的価値判断に対してとった態度変容（原，2），そこでは，上級学年の学生が，自己の道徳規範を他人並に低下させることによって，内的葛藤を緩和させようとする傾向と，丁度逆の方向である。しかしながら，内在的心理的機制は同種のものとは云えないであろうか。この観点から最後にこれらの分析と共に，この調査全般の結果を吟味したい。

III. 要約と結語

本調査研究を通し，次のような結論を得ることができた。

大学生の職業選択に働く動機要因は，洋の東西を問わず，また時代の変遷にかかわらず，相似た要素（価値志向）を持っている。（調査A）

この職業的価値に対する選択順位は，大学，性，学年，入学年度にかかわらず，極めて似通った反応パターンを示す。（調査B，C）

自己の職業的価値に対し，一般社会は大層異なる価値規範を設けていると認知する。この価値体系の葛藤は，大学在学中に左程減少しないが，「他人」も自己の理想，すなわち自己表現と他人志向に近い判断をすると認知し，また報酬志向では自ら他人の価値に同調することによって，内在する欲求不満をいささかでも解消させようとする傾向が指摘される。（調査D）

以上のような観察から，次の如き推論をあえて行い，今後の高等教育に於ける広義の職業指導を考えたい。

現代の青年達は，現実の生活の場において，社会の通念として報酬志向の尊重が根強く浸透していることを肌を通して知っている。決して自分の価値観の期待通りに，「他人」の価値判断を変えて認知するほど未熟で非現実的な社会的観念を持っているわけではない。またそこにおいて，自ら世の指導者となって経綸を掲げ，精神革命をもたらす程の勇氣も手腕も持

ち合わせてはいない。さりとて自己の理想を一般的な社会的常識にまで引き下げて、精神的奴隷になり下るには、今迄受けた教養とエリート意識が禍いとなる。そこで内在する葛藤は、比較的抵抗の少ない無難な領域、ここでは自己表現志向と他人志向の面における「他人」の評価の増大と云う所に、内在する緊張に解消の糸口を与えているやに見受けられる。しかしこの安易な主観的社会認知は、卒業が間近くなって社会生活が切実なものに映ると共に、その防衛機構としての有効性の限界にぶつ当たり、そこから発生する欲求不満は、更に不健康な抑圧と無感動へと発展する危険性を持っている。今日「若者の怒り」と称する動機の不明確なエネルギーが、一方において伝統的社会秩序を否定する行動派を生むと同時に、他方極端な社会的無関心派を作り出している。この分極作用の原因の一つとして、青年期の不安、特に進路指導の不足から生ずる欲求不満を見い出す時、自から今後の高等教育の中における、然るべき職業指導のあり方が示唆されよう。

学生達は卒業を目前にして、社会人としての新らしい役割りを予期し、自らに期待をかけている。本章を終るに当り、彼等が内に芽生えた価値意識を育てながら、正しく現実を把握し、自然と歴史に確かなる洞察を持ちつつ、神と人にとり奉仕できる教養人としての自覚を深めて、雄々しく社会に巣立つことを念じて止まない。この目標達成のため、如何なる方法が可能であるか、本学の教育プログラムの中で再考してみたいと思う。(本学助教授)

参 考 文 献

1. Crites, J. O. Factor analytic definitions of vocational motivation. *J. appl. Psychol.*, 1961, 45, 330—337.
2. 原一雄「大学生の価値観の研究(その5)——“自己”および“他人”の道徳判断」日本教育心理学会大会発表論文集, 1966, 132—133.
3. Maslow, A. H. *Motivation and personality*. New York: Harper, 1954.
4. Laird, D. A., and Laird, E. C. *Practical business psychology*. New York: McGraw-Hill, 1956.

5. 中西信男・武衛孝雄「Value に関する研究 (2) (3)」日本教育学会口答発表資料, 1961.
6. O'Conner, J. P., and Kinnane, J. F. A factor analysis of work values. *J. counsel. Psychol.*, 1961, 8, 263—267.
7. Roe, A. *The psychology of occupations*. New York: Wiley, 1956.
8. Rosenberg, M. *Occupational choice and values*. Glencoe: Free Press, 1957.

(追記: この調査の資料整理にあたっては藤田恵璽氏の協力を得、且つ本学 Computer Center の IBM 1130 が使用できたことを、感謝をもってここに付記する。)

Occupational Values of College Students

Kazuo Hara

Occupational values of ICU students were investigated by Rosenberg's Occupational Value Inventory, as a part of the university project entitled "A study of students' values" led by Dr. M. E. Troyer.

Basic data for this report were obtained from the members of the Class of 1966, who were systematically investigated 3 times during their 4 years of college. These results were also compared with the ones of the Classes of '67, '68 and '69 as well as with some published data of Cornell University and of Osaka University.

The inventory was composed of following 10 items based on 3 basic vocational value orientations—self-expression, extrinsic reward and orientation towards people.

- a. "Provide me an opportunity to use my special abilities or aptitudes"
- b. "Provide me with a chance to earn a good deal of money"
- c. "Permit me to be creative and original"
- d. "Give me social status and prestige"
- e. "Give me an opportunity to work with people rather than things"
- f. "Enable me to look forward to a stable, secure future"
- g. "Leave me relatively free of supervision by others"
- h. "Give me a chance to exercise leadership"
- i. "Provide me with adventure"
- j. "Give me an opportunity to be helpful to others"

Unlike other studies, the Ss for the present study were asked to respond to the inventory in two ways, i. e. to express (1) their own feelings of importance for these 10 items and (2) how they thought that society in general would evaluate

them. Evaluation of responses was done by rating as well as ranking these items.

Factorial study of the occupational values.

The 3 factors extracted by means of the varimax rotation method were similar to the ones found by Rosenberg. Although sex characteristics appeared in a few items, factor loadings for each item were generally similar for both sexes. (Table 2)

General response pattern as regards the occupational values.

The freshmen's response patterns of 4 different classes were compared. In the same manner, the sexes were compared and the Class of '66 was followed up twice during 4 years. From these analyses, no significant sex, college year, or group differences were found in the occupational values for both "Self" and "Others." ((Fig. 1~6)

Similarity of the occupational values among different college Ss.

Fairly high degrees of similarity were found between the ICU, Osaka and Cornell groups when their rank orders of the inventory items were compared in terms of the *rho* coefficients. (Table 6)

Conflicts between "Self" and "Others" occupational values.

Unsolved conflicts in the Ss were detected from the fact that two patterns of occupational values, one for "Self" and another for "Others", showed a marked divergence. Near their graduation, however, these Ss, frustrated due to the discrepancies between the two frames of reference, seemed to reduce their internal tensions not only by raising their appraisal towards the extrinsic reward orientation, but also, at the same time, by deceiving themselves that the "Other" people might regard the self-expression and people-orientations as highly as they themselves did. (Fig. 7, 8, 9)